

八代妙見祭について

安田 宗生[※]

はじめに

八代市は東は竜峰・高田山系の山々に囲まれ中央を貫流する球磨川の河口一帯に広がる扇状地に位置する。同市宮地町に鎮座する妙見宮は慶応4年(1868)の神仏分離令より、天御中主神・国常立尊を祭神として八代神社(県社)と改称した(以下妙見宮という)。この妙見宮の秋の大祭は、妙見祭と呼ばれ、華やかな神幸行列を伴うこともあって、九州3大祭の1つとされ、多くの見物客で賑わう。

妙見祭の中心となる妙見宮は、上宮・中宮・下宮の3社から成る。この3社の創建について、妙見宮の神官であった緒方惟盈によって享保15年(1730)に記された『妙見宮実紀』、及び『肥後国志』にほぼ同内容の記載がある。それによると、

上宮は桓武天皇の勅願により延暦14年(795)に宮地村の横嶽頂上に創建された。横嶽には御室の神廟跡があるためにミムロダケ(御室嶽)と称するが、一説には3室の神廟があるため三室嶽と呼ばれるともいわれている。

中宮は永暦元年(1160)に二条天皇の勅願によって、参詣に不便なため横嶽頂上から横嶽の麓に遷したといわれ、肥後国司であった平貞能が40町の神田を寄進し、社殿を創建したと伝えられる。後に神幸行列の御旅所とされた。

妙見下宮は文治2年(1786)に御鳥羽天皇の勅願によって、檢校散位の大江高房が現在地に建立したとされる。

中宮と下宮が天皇の勅願によって建立されたということについては、それぞれの願文が『肥後国志』に掲載されているが、後世の偽作と考えられている。

これらの妙見三宮は神仏両部の宮寺であり、白木山神宮寺の支配下にあった。妙見下宮の時代には、神宮寺を首坊とする天台宗8坊・真言宗7坊、合計15坊が妙見宮の周囲に建ち並んで栄えたといわれ、松井家に伝わる弘化3年(1846)に描かれた祭礼絵巻に、籠に乗った神宮寺の僧侶と徒歩で従う天台・真言宗15坊の僧侶が描かれている。

妙見宮の起源については『肥後国志』や神社所有文書などに詳細に記述されているが、これらの縁起書はいずれも近世に記録されたものである。妙見神渡来についての伝承は多数あるが『肥後国志』にいくつかの説が挙げられており、社僧の説として

住昔漢土白木山神目深手長早足明州ノ津ヨリ白鳳九年ニ来朝シ竹原ノ津ニ着岸シテ三年仮座ス本朝妙見ノ始也ト…或曰妙見神ハ百濟国王斉明来朝又ハ第三皇子林聖太子トモ云八代郡不知火崎

※熊本大学文学部助教

ニ着ス船頭ヲ八大竜王ノ垂迹トシ後ニ神ニ祀テ八王明神也ト云

という伝承があることを述べ、さらに、社家の説には

北辰星ハ…即チ国常立尊也此ヲ天ノ主北辰星ト称ス…妙見神竹原ノ津ヨリ益城郡小熊野千代松ヶ峯ニ移リ給フ云々…

とあることを紹介している。このように、妙見神に関するいくつかの伝承が存在する。この当時から既に仏教、神道側からの説明がなされていたものと思われる。この点も重要であるが、ここではこれ以上触れないことにする。

この妙見信仰伝来に関する史料については蓑田鶴男が詳細に紹介している [蓑田 1970: 30~56]。また、この縁起の持つ意味については金指正三が詳細な検討を加えている [金指 1973: 246~254]。

なお、妙見の寄港地として植柳の津と浅井の津が挙げられているが、植柳には妙見5社の1つである植柳妙見社がある。浅井の津は現在の北の丸町の代陽小学校内にある、浅井神社であるといわれ、八大竜王を祀るためヤツオウサンと呼ばれる。伝承では“妙見さんが海の潮水で洗い流したためヤツオウサンの池の水は祭の日には塩辛い”という。現在も11月15日の八王社例大祭では、妙見祭に奉納する神馬と獅子が池の水で垢離清浄している。このように妙見神渡来伝承に基づき、妙見宮との関係を説く神社が八代にはある。

全国的にみても熊本県は妙見信仰の盛んな地域の1つとされており、これまで県下の妙見信仰の拠点八代妙見宮と考えられている感がある。

しかし、これまで八代妙見宮を含め、県下の妙見信仰についての調査がなされてこなかった。従って、八代妙見宮とその他の妙見とがどのような関係にあるのかはほとんど明らかにし得なかった。筆者はかつて八代妙見以外の妙見信仰を調査したことがある。その結果、大部分が水神として信仰されており、八代妙見とのつながりを説く事例が少ないこと、神体も八代妙見のように亀蛇の上に乗ったものがそれほど多くなく、自然の岩や木などが大半を占めている。つまり、妙見と呼ばれてはいるが本来の妙見信仰とは掛け離れたものであることを指摘した [安田: 1993]。そこで、熊本の妙見信仰の中心と目される八代妙見の祭りがいかなるものであるかについて述べることは意味があるかと思う。

2 妙見祭の形成

現在のような形の妙見祭の神幸行列が形成されてきた背景には、八代に支配の拠点を置いて城下町を形成してきた代々の城主の多大な影響がある。この八代城主がどのように妙見宮とその祭祀に関わってきたのかも、妙見祭を理解する上で重要である。

戦国時代、相良氏はそれまで八代を支配していた名和氏と争って勝利し、相良氏は人吉から八代の地に出てくる。そして、相良義滋により天文3年(1534)に古麓の鷹ヶ峰に城が築かれ、杭瀬3町、あるいは八代3町といわれる城下町が形成された。この城下町の形成に妙見宮の門前町が大きくかかわってたとされる [阿蘇品 1991: 67~68]。八代は相良領外との交易や国外との

貿易の拠点して発達していった。

天正15年（1587）に豊臣秀吉が島津を討つため八代に入り、4日間滞在しているが、その時、八代は肥後のなかで最も豊かな所であると述べている。その後、秀吉は宇土・八代・益城の3郡24万石を小西行長に与える。行長は古麓の山城を廃し新しく球磨川三角州の麦島に城を築いた。ここを拠点として行長は貿易を行った。また、麦島は西海の海上権を得るのに適当な場所であったとされる [森山 1991：68～71]。

ただ、彼はキリシタン大名であったため、領内の神社・仏閣を弾圧したとされ、彼によって神社120社、寺院127寺が破壊されたといわれる。『妙見宮実記』によれば、妙見宮も天正16年（1588）に全面的な破却に遭ったと記されている。その際文書等も焼失してしまったという。

小西氏滅亡の後、加藤清正が肥後一円を支配するが、幕府が出した元和元年（1615）の一国一城令によって、肥後各地の城が破却されるが、麦島城のみは存置が許可された。その理由については、海上警備と九州西街道の防備のためであったともいわれている。元和5年（1619）の大地震で麦島城が崩壊したため、八代城代の加藤正方によって松江の地に新城が築かれる。これが現在松江城町に残る八代城である。この城下町に麦島城下から本町・宮ノ町など幾つかの町が移転され、それを元に町割がなされたと考えられている。

加藤氏改易後、小倉から細川忠利が肥後藩に移封され、父三斎は寛永9年（1632）に隠居地として知行高9万2000石で八代城に移る。三斎は八代入りすると、妙見宮を八代管内の一の宮としての社格を与える。この格別の崇拜の動機として『肥後国誌』及び『妙見宮実紀』にはほぼ同じ意味の記載がある。それによると、三斎公が妙見宮を参詣し、同社の神宝である四寅剣を御覧になったところ、剣に彫られた二引両と九曜紋の神紋が細川家の家紋と同じであることに喜ばれ、細川家の守護の神として崇拜した、ということになっている。そのため三斎公は寛永13年に本殿や拝殿の建造物と共に神輿・神輿屋・祭礼用器・社家の装束を寄進して絶えていた妙見宮の祭礼（旧暦10月18日）を復興した。このようにして妙見宮は細川家の守護社となり、その祭礼は熊本藩の藩主の直祭として援助を受けることになったが、祭礼の指図は八代城主の三斎が成り代わって務め、熊本からは藩主の御名代が出向いて来る形になった。祭典費は200石と決まっていたが、宝暦の改革で細川重賢公が領地の半分を召しあげてしまった。毬の際には細川藩主の御名代として年々家老2人を順番に熊本から差し向けられていたといわれ、妙見宮鳥居前には御名代棧敷が設けられたという。後年は松井家家中の観覧席となって近年まで残っていた。

三斎の死んだ正保4年（1647）から城代として松井氏が八代を治めることになり、妙見宮の祭礼も藩主の細川氏の祭りを家臣格の松井氏が代行する請け祭りという性格を強めていく。それまでの祭りは、神輿に城主や家臣から出される神馬・飾馬12匹・流鏑馬・鉄砲100挺・長柄槍50本に社僧・社人・巫女が行列を構成していたと考えられる。

しかし、松井家第3代直之公の治政に当る元禄初期から、松井家の保護の元に城下町からは中島町の獅子、本町を始めとする各町から笠鉾9基、出町の亀蛇・木馬、それに高子原村からは奴と、次々に城下の町村からの行列に参加する出し物が増えていった。

町方の参加の背景には、藩主である細川家に対する松井家の配慮があったといわれている。松井家は八代城主でありながら同時に細川氏の家臣でもあり、細川家の祭りであったものをおろそかにしてはならず、祭礼を華やかにすることに心がけ、元禄期に入って財力を蓄えていた城下町の豪商の協力を取り付けて祭礼の執行に当たったとされる。これらの町人などが何時頃から参加したか、その年代は確定し得ないが、明和元年（1764）の『八代紀行』に妙見祭神幸行列の様子が克明に描かれており、この頃には現在と同じ出し物がほぼ揃っていることが判明している。

町方・在方の出し物はほとんどが自主的な参加だったされているが、松井家は祭りに参加する各組に経済的援助や特権を与えていたと伝承されている。たとえば、現在の夕葉町から緑町の一帯は、戦前まで野上地区と呼ばれ、松井氏のオタカンバ（御鷹場）だった。この範囲の田畑を笠鉾を出す9町内に与え、町内ではそこから得られる小作料で祭典の費用を賄っていたと伝えられている。現在の緑町から末広町辺りまではノガミ（野上）と言われた河原地区で、このような0番地は松井家の所有地とされ、以前はタカンバ（鷹場）とも刑場後ともいわれる。このノガミの中の耕作地が笠鉾各組、獅子に1反7畝づつ与えられていた。宮の町は今の市民球場がある辺りに所有していた。これを仕事に余裕のある家17件が30坪づつ受けて耕作し、そのトクマイ（小作料）を妙見祭の祭典費と消防組の運営費に当てていた。昭和23年の農地解放により、校区が太田郷校区にあったこともありすべて国有地として払い下げられてしまった。あるいは、奴には切り捨て御免の特権を与えていた、獅子組・笠鉾組に対しては祭りの際に絹衣装着用を許可していたと伝えられている。

このように、直之公を始め松井家代々の城主は神幸行列に参加する組をさまざまな形で庇護していた。これに答えて、戦前まで獅子・笠鉾・亀蛇・奴は18日のお上りが終了した後、それぞれ御礼参りと称して、松井家に挨拶に伺っていた。

近世末まで祭の統括は松井家の祭典奉行が務めていたが、明治に入ってから、参加団体ごとのまとまりがあるだけで、祭り全体を統括する組織はなくなってしまい、これまでの慣例に従って祭りが運営されてきたといわれている。その頃は何かと揉め事が多かったという。それで、昭和40年代に神幸行列保存会が発足し、参加団体全体の調整が計られるようになった。

3 祭祀組織

現在、祭祀に参加している地区は八代市宮地町・妙見町・西宮町・古麓町・東町・上日置町・中片町・西片町・川田町西・古閑上町・古閑中町・古閑下町・田中町、八代郡千丁町の新牟田に及んでおり、祭祀に関する地区は約1500戸である。町部を除くと氏子のほとんどは農家である。

これらの町から選出された総代20名が総代会を組織し、妙見宮の祭などの運営に当る。総代はそれぞれの町の評議員、囃託員の推薦などで選ばれることが多い。総代のなかから責任総代2名、監事2名が選出され、この4名と宮司で計画案が作られる。責任総代のうち1名が総代会会長となる。任期は3年である。4月に予算・決算の会が開催される。また、祭りの前に総会が開かれ、会議の決定事項は各地区の総代を通してそれぞれの区に伝達される。

妙見祭に奉仕する地区は、上記の地区を10地区に分け、それぞれの地区が1年交替で務める年番の形をとっている。この10地区を『肥後国誌』における村名でみると、

新牟田村（八代郡千丁町新牟田）、八代市の西河田村（川田町西）、宮地村（宮地町・妙見町・西宮町）、古麓村（古麓町）、猫谷村（東町）、中片野川村、（中片町）、下片野川村（西片町）、上日置村（上日置町）、古閑村（古閑上町・古閑中町・古閑下町）、田中村（田中町）

となる（ ）は現在の町名である。

神幸行列の各出し物の団体は、松井家時代の八代町の町割区分に基づいて組織されている。各出し物を奉納する町組名は、

獅子は中島町、亀蛇は出町、笠鉾9基はそれぞれ宮ノ町（菊慈童）・本町（本蝶蕪）・二ノ町（蘇鉄）・新町（西王母）・紺屋町（狸々）・中島町（蜜柑）・徳淵町（恵比須）・平河原町（松）・塩屋町（迦陵頻伽）

となっている。宮ノ町は妙見社の門前町から、麦島城の町組に移り、その後八代城の城下に移ってきたものである。今のような形の鉾は、文化文政の商人が一番栄えた時代に出来あがったと思われる。

麦島城下において、最初に作られた商人町が本町、そして次に二の町、新町と作られていくがそれと関係して“町順”という町の格のようなものがある。笠鉾の順序がほぼこれに当たる。町順は本町、二の町、新町、紺屋町、中島町、徳淵町、平河原町、塩屋町の順となる。戦後までこれらの町名と町割区分はほぼ以前のまま続いてきたが、昭和40年に町の区域・町名が大幅に変更された結果、紺屋町・中島町・徳淵町・平河原町は本町（1～4丁目）に、宮ノ町・二ノ町・新町は通町や袋町にそれぞれ組み込まれ、町名の残った町も以前とは区画が異なるようになってしまった。

笠鉾はかつてはいずれも担いで練り歩いた。重量がかなりあるため、古くから担ぎ手は東陽村や坂本村といった山間部の農家の若者に依頼していた。平地の者ではとても担ぐことができないので、足腰の強いこれらの地域の者を選んでいたという。契約は各町ごとに行っていた。日当は少なくとも当時の賃金の倍は出していたという。

人数は8名で十分であったという。年配の者が担ぎ方を教えていた。この頃は休憩時には笠鉾を竹の棒で支えて、地面に下ろさないようにしていた。地面に下ろしてしまうと持ち上げるのが大変だからである。

車輪をつけて引っ張るようになったのは昭和27年頃からで、担ぎ手の確保が難しくなってきたのが原因である。ただ、笠鉾すべてが一斉に車輪をつけたのではなく徐々に代わっていった。最初は塩屋町で最後が宮ノ町であった。

妙見祭に奉仕する成員は、各町内の総代20名と神輿その他の祭器の担い手である白丁約60名と年番幹事12名である。氏子総代会長と副会長が午前と午後に分かれて行列の先導役を務め、その他の総代は神輿や祭器の警護の役割として行列の間につく。奉仕者は年番と呼ばれる。平成4年度は上日置町であった。区長や評議員、町内会役員などが年番幹事となり、町内から白丁として

奉仕する者を集める。奉仕者は男子のみである。平成4年までは祭が平日だったこともあり、奉仕者が少なく、また2日間通して出る人も少なかった。そのため、祭器の軽量化を図ることで白丁の数が少なくて済むようにしている。

神輿は昭和15～26年頃にタイヤをつけて引き動かす形にしているが、引き手は以前と変わらず12名である。白丁は白装束に烏帽子をつける。年番幹事は行列の警護につく者が半数で残りは妙見宮で参詣者の御祓いや賽銭の管理を行う。以前は17日の夜は年番と総代がそれぞれ御旅所と妙見宮の2手に別れて夜警を務めていたが、現在は行われていない。

宮地町と妙見町の氏子は、お上りの日に神幸行列の各団体が食事をしたり休息をとるための場所であるヤド（宿）を提供している。宿としては昼食をとるためのホンヤド（本宿）と、休憩場所としてのナカヤド（中宿）の2ヵ所を確保する団体が多かった。宿は宮地町の妙見宮付近と妙見町の砥崎の河原付近に集中している。宿は宮司が斡旋してくれる場合がほとんどで、宿として固定した家がある訳ではないが、一旦引き受けると何年か続ける家が多い。宿になった家は基本的に休憩の場所として部屋を提供するだけで、食事の世話などはしない。ただし、以前は獅子の宿だけは昼食の用意をしたという話が聞かれる。宿には妙見宮と各団体から謝礼が出される。

しかし、現在の家屋の作りでは大勢の人員を収容できる座敷が設けられないことや接待客が多いことなどから宿を引き受ける家が減り、ほとんどの団体が宿を1つにしたり、公民館などの公共の建物で休憩するようになっている。

18日の祭り当日は妙見宮付近の氏子の家では朝から晩まで親戚・知人などを家に招いて接待する。かつては客に鰯、カジキなどの刺身・竹輪・蒲鉾・煮しめ・巻寿司・羊羹などを懐石膳または鉢盛りで出していたため、17日の日から眠らずに用意したものという。18日には朝から赤飯を炊く。

18日に来客を接待する家ではゴヤマイリに行くことはほとんどなく、祭の日も客の対応に忙しくこの日も参拝できないことが多い。

また“18日の夜に妙見宮に参ると神風が吹く”といわれ、参拝しないものとされている。そのため、両日とも宮に行けない人は19日に参拝することが多い。

4 妙見大祭

妙見祭の大祭は明治4年までは旧暦10月17・18日に行われていたが、暦法の改正に伴い明治5年からは新暦11月18日に行われるようになった。この妙見祭は大祭の前後に次のような行事が行われる。

10月31日 シメナワタテ。11月1日 シメオロシ。11月11日 馬揃え。11月15日 大祭一日祭。11月16日 大祭二日祭。11月17日 ミタマウツシ・献幣式・お下り。11月18日 お上り。11月20日 大祭終了祭。12月1日 シメオサメ。

なお、大祭に先立って、11月8日には妙見宮清掃・馬小屋作り・砥崎の河原と中宮の清掃など祭りの準備が行われる。

シメオロシ (11月1日)

〈11:00~11:20〉 拝殿に氏子・氏子地区の嘱託員・年番が約70人参列し、最前列にはそれぞれの代表者が座す。幣殿には神撰の水・野菜・御神酒・鯛2匹・果物が供えられ、その前に獅子の箱が3つ並べられる。宮司が祓詞を奏上して参加者を祓う。神撰の水・酒の蓋を開けて祝詞を奏上する。宮司・氏子総代会長・嘱託員代表・年番代表の順に玉串を供える。宮司は水、酒の蓋を戻して終了する。その後社務所において直会になる。直会では奉賀帳が配られる。

〈11:20~13:00〉 獅子組幹部・獅子の舞手・玉振りの子供と親が20名ほど集まり拝殿にゴザを敷き準備にかかる。神馬が到着すると馬は拝殿前の四足門に控え、代表者が5名拝殿に上がり、獅子組と合流し神事が始まる。宮司が太鼓を叩き、祓詞奏上する。祓詞が終わると馬は参集殿の馬つなぎ場に向かう。宮司が参列者を祓い、祝詞を奏上する。獅子組・神馬の順に玉串を捧げる。この後獅子組と神馬代表者と宮司による会食がある。

馬揃え (11月11日)

〈12:00~〉 各団体の飾馬が次々に集まる。馬は鳥居東側の馬つなぎの場所につなぐ。馬の到着順にセキヤク(責役)と呼ばれる氏子総代2名が、儀礼的に馬の年令、背丈、毛色の検査を行う。終わると鳥居を潜って拝殿の前で宮司より馬とセコ達が御祓いを受ける。御祓いの時、各団体は酒と包み金を持参する。御祓いが済むと、神殿前の階段の1段目に馬の前足を乗せて参拝させる。この後、境内を順次馬を走らせたり歩かせたりする。

ミタマウツシ (11月17日)

〈23:30~0:37〉 宮司が風呂に入り身を清めた後、酒・水・塩を載せた三宝を拝殿左側に置く。祓詞を奏上し、幣殿と拝殿において御祓いをする。幣殿に上り祝詞を奏上する。拝殿に戻り、覆い箱に入った蠟燭に火を点け箱の蓋をする。拝殿を出て電気を消す。白い手袋とマスクをつけ、蠟燭の箱を持ち幣殿に入る。神輿の前の白い布を下ろして内側に入り、ミタマウツシが行われる。幣殿から出ると蠟燭の火を消して電気をつけ、幣殿の白い布を外す。

次に、猿田彦の順番を決める。猿田彦は日王(赤)・水王(緑)・風王(黒)の3面があり、それぞれ晴・雨・風の天候を表すとされる。予め用意していた酒などを幣殿の神輿の前に置き、蓋を開ける。それから、祝詞を奏上する。神輿前の御幣を取り、三宝の土を3回なぞってから、三宝に入れられた順番を記した紙片を御幣でつりあげる。御幣を元に戻し、紙片を開いてなかを確認する。その紙を封筒に入れ右端の三宝に載せる。瓶子の蓋を閉め拝殿に戻り終了する。この年行列の最初に立つ猿田彦がどれかによって翌年の天候を占った。赤なら天候がよい、緑なら雨が多い、黒なら大風が吹くという。農家ではこれをみて早稲、晩生などの品種をどれくらい播くかを決めていたという。

献幣式

〈11:00~12:23〉 式の参列者約70名が拝殿に入場する。神職7名が社務所前で氏子の介助で手と口を清めた後、拝殿に入る。太鼓と笛が鳴らされるなか、神職は神殿に向かって左側に宮司を含めた5名、右側に献幣使と随員の2名が座る。左側の神官が2名が神職・参列者を祓う。1

名は御幣で、1名は皿の塩を榊の葉で撒く。左手の神職が警畢を発するなか、宮司が神殿の扉を開け御簾を上げる。雅楽のテープが流れるなか、三宝に乗せた供物を神官4人が手渡しで御簾の中に運ぶ。その間宮司は幣殿脇に控えている。供物が供えられてから宮司が祝詞を奏上する。右側の随員が箱から祝詞文を取り出し献幣使に渡す。献幣使が祝詞を奏上する（神楽が始まる。神楽は平成4年は演じられなかった）。

宮司・献幣使が玉串を供えた後、氏子代表から順に各団体代表者が玉串を供えていく。雅楽のテープが流れるなか、供える時と同様の手順で供物を下ろす。宮司の警畢の声とともに階上の扉を閉ざし御簾を下ろす。献幣使・随員が退場した後、宮司の挨拶があり、その後社務所で直会となる。

お下り

〈13：05～16：40〉神輿は拝殿に安置して、前には供物を供える。向かって左側には猿田彦と阿須波の神が祀られる。参集殿で着替えを済ませた白丁が太鼓の音で拝殿に向かって整列する。年番代表・氏子総代は神輿の左側に控える。本宮発輦祭が開始される。神事はお上りの発輦祭と同様である。神馬が到着すると、馬を拝殿前に曳いてきて待機する。神馬御供報告祭が開始される。

神官が宮司・奉納者・神馬の順に祓う。宮司が祝詞を奏上した後、宮司・奉納者の順に玉串を供える。太鼓が鳴り響くなか、宮司は拝殿から下りて金幣で馬を祓う。神馬は境内を1周して戻り、宮司が金幣で祓う。同様に全部で3周した後、神輿に向かって一礼してシデを頭につけてもらい、神輿が出るまで馬は鳥居外で待機する。白丁8人で神輿を抱えて拝殿から出して車台に乗せ、頂上に鳳凰の飾りを付ける。行列の大太鼓が鳴らされ、神馬を先頭に祭器と神輿のお下りが出発する。塩屋八幡宮に到着すると、本殿に向かって右の仮設の建物に神輿を安置して着輦祭を行う。神事は発輦祭と同じである。

伝承によれば、三斎公が塩屋に宇佐八幡を勧請してからお下りが始まったとされる。現在のようなお下りは昭和25年には既に成立していたという。ただ、古くは塩屋八幡の鳥居前に集合するだけであったとされる。

なお、17日の夜、氏子達が妙見宮に注連縄を持って参拝するゴヤマイリが行われる。これをハダカンギョウ、ホイホイ、またはホイホイマイリともいわれ、参拝する人をホイホイドン呼んだ。

参拝者は白着物を着て、裸足もしくはアシナカを履き、腰には注連縄を締める。そして“ホイホイ”といいながら妙見宮まで走って行き、参拝して拝殿の周囲に注連縄を結びつけて帰る。女性も行うが髪を後頭部に束ねて白い紙で縛って（アトムスビに）参拝したという。それから、子供がお参りすると風邪を引かないといわれ、子供の参拝が奨励されていた。忌中にかかっている者は宮の正面から入らずに裏から入る。宮の正門には宮の番をするヤゴロウサンという神がいるためである。このお参りは1人でも複数で行ってもよいが、妙見宮までの道中は掛け声以外発してはならず、また後ろを振り向いてはならないとされている。

奉納する注連縄はできるだけその年の新藁を使って作る。また、普通の縄を綯う時のように唾

を使うことは禁止され、水を手に掛けて絞う。縄には7・5・3本の藁を下げる。宮では、以前はゴヤツトメをしている神主が御祓いをしていた。

お上り (11月18日)

〈5:38~7:00〉 宮司と祢宜、年番・総代がそれぞれ塩屋八幡宮にやってきて本殿と神輿に拝礼した後、社務所に入る。飾馬の代表者が到着すると太鼓が鳴らされ、社務所内で飾馬予備抽選が始まる。三宝に宮司の作った白紙の籤が乗せられ、各人がこれを引く。全員外に出て神輿の前に一列に並び、本抽選を行う。神輿の前に神官によって供物が供えられる。社務所において神官と氏子総代8名とが会食する。神官の挨拶があり、着物は午後の人達に渡すようにとの指示が伝えられる。食事が終了するとそのまま待機する。神馬が塩屋八幡に到着すると、神官が着替えを始める。

〈7:00~8:00〉 塩屋八幡に集まった人達が並び始め、神事が開始される。神官が祝詞を奏上する。御幣で宮司を、それから神馬・神輿・奴を祓う。宮司が祝詞を奏上する。神官が玉串を宮司に手渡す。宮司が神輿に捧げる。神官は宮司の後ろに位置し宮司の動作に合わせる。次いで奴・神輿・神馬の代表者が玉串を捧げる。それに合わせて一同の者が拍手を打つ。神官は宮司の後ろに位置して同じ動作を行う。宮司が挨拶して式は終了する。神輿が仮設の建物から出る。榊・阿須波の神・猿田彦・祭器・神馬・神官・潮振り・神輿・宮司が出発し神社前の道路にて待機する。

神幸行列は、宮司を含む神職2名と氏子奉仕者、それに近隣町村から出される獅子、奴、神馬、笠鉦、亀蛇、飾馬の各団体を中心として構成される。近年神幸行列保存会を中心に前述の松井家所蔵の絵巻を元にした行列の形を整えようという動きが活発であり、昭和61年には武者行列、62年には木馬、平成2年には鉄砲、毛槍、籠が復元され参加している。平成4年度の神幸行列は次のような順になっている。

1, 獅子 2, 奴 3, 木馬 4, 鉄砲 5, 毛槍 6, 神馬 7, 籠 8, 御幸奉行 (武者行列) 9, 甲冑武者 10, 大麻 11, 大太鼓 12, 神官 13, 笠鉦・菊慈童 14, 阿須波神 15, 火王・水王・風王 (猿田彦) 16, 奏楽大太鼓 17, 奏楽 18, 四神旗 19, 金幣 20, 弓矢 21, 対の御槍 22, 御太刀 23, 神輿 24, 長刀 25, 紫翳 26, 菅翳 27, 中傘 28, 齋主 29, 笠鉦・本蝶蕪 30, 笠鉦・蘇鉄 31, 笠鉦・西王母 32, 笠鉦・狸々 33, 笠鉦・蜜柑 34, 笠鉦・恵比須 35, 笠鉦・松 36, 笠鉦・迦陵頻伽 37, 亀蛇 38, 飾馬

なお、弘化3年の神幸行列絵巻には神社の巫女が加わっている。一般の女性は参加できないことになっていた。

〈8:00~11:55〉 爆竹の音で、行列は並んで出発する。道中では人々が阿須波の神、猿田彦3体、神輿に賽銭をあげる。八代駅広場を神輿は楽器を伴って1周する。八代駅は明治32年にできたが、この時から午前中は駅前広場で見せ物を見せるようになったという。

〈11:55~13:40〉 妙見宮に到着。神輿を拝殿の中に担ぎ込み、台の部分を取り外す。神輿の前に供物を並べ、神事が始まる。神官が祝詞を奏上し御幣で宮司を祓う。神官が供物の酒の蓋を

取る。神官が祝詞文を宮司に手渡す。宮司が祝詞を奏上し、神官が玉串を宮司に手渡しそれを神輿に供えて神事が終了する。神官が酒の瓶の蓋をする。供物を取り下げる。これまでに神輿にあげられたお賽銭を年番の人達が集め、他の袋に入れる。神輿は拝殿を出て宮地小学校の笠鉾が飾られた前に安置する。

宮の町の菊慈童だけが、妙見祭に奉納する笠鉾である。他の鉾は、祭礼のお供である。妙見宮に菊慈童が着くと、鳥居前の四つ角に据えて、神輿が砥崎に出発するまでそこで待機することになっていた。他の笠鉾はそれぞれの宿の前に据えた。平成3年から小学校の校庭に展示するようになった。この間笠鉾の関係者は中宿で休憩をするが、笠鉾にはバン（番）と呼ばれる役が木刀を持って警備に当たっており、妙見宮に奉納にくる馬やガメの尻尾が笠鉾に触れたりすると木刀で叩いて回っていたという。

〈13：40～15：30〉爆竹が鳴り、神輿が出発する。砥崎を通り中宮へ向かう。神馬・武者・神官・小さい神輿・猿田彦・楽手・旗・神輿・宮司が中宮へ上る。

砥崎からの帰りは宮の町以外の笠鉾は、行きとは逆になり、塩屋町の鉾を先頭にして戻る。

〈15：30～16：40〉神輿を据えると神事が始まる。神官が祝詞を奏上し御幣で参列者を祓う。これが終わるまで獅子は広場の中に入らずに外で待機する。神官が祝詞文を宮司に手渡し、宮司が祝詞を奏上する。神官が玉串を宮司に手渡しそれを神輿に供える。参列者の代表が玉串を神輿に供える。宮司が太鼓を鳴らす。それから獅子が演技を開始する。神馬はほんの少し広場の中に入るようにして挨拶して戻る。獅子の演技が終了すると神輿は中宮を出発する。

〈16：40～16：55〉神輿が妙見宮に戻る。神輿を拝殿のなかに持ち込む。神輿を引いていた人達は拝殿でそのまま待機する。神輿に上げられた御賽銭を取り出してから、神輿を引いていた人達が神輿を担いで拝殿の外に出る。神輿を台に乗せ宮のそばの倉庫に収める。拝殿では宮司が祝詞を奏上して神事が終了する。

お礼参り

出町で笠鉾が勢揃いすると時刻は6時頃になるので、そこからそれぞれの組が提灯をつけ、町順に並んで、松井さんに挨拶するとその場でテジメをして解散していた。現在はお礼参りがいないため、出町で他の鉾を見送った後、直接妙見社前まで戻り、鉾を置いた後、テジメで解散している。以前笠鉾は松井家の茶室前に並んで挨拶せねば帰ることができなかった。

なお、妙見祭の神幸行列の経路は昭和32年に道路交通法が施行されてからも何度も変わっているが、正確に把握できないでいる。

シメオサメ

〈11：00～11：20〉獅子組5名が獅子の入った3つの箱を運び入れ、幣殿に置く。全員が一礼して、宮司が獅子組一同を祓う。神前の酒の蓋を開ける。全員起立し宮司が祝詞を奏上。太鼓を鳴らす。宮司、獅子組代表の順に玉串奉納。宮司が酒の蓋を閉め神輿に一礼してから、宮司が獅子組5名に御神酒を注ぎ、それぞれが飲む。獅子組が箱を神殿に収めて帰る。

〈12：05～12：21〉神馬の申込者は、12月1日の12時で締め切られる。平成4、5年ともに1

団体であったため、神馬の抽選はなかった。神馬奉納者は御神酒を奉納し、御神酒を前に神馬代表者5名と氏子総代17名が参列して神事が行われる。神事内容は獅子組と同様である。

おわりに

以上が妙見祭の概要であるが、この八代妙見祭は、亀蛇と9基の笠鉾が出るのが1つの特徴であるといえる。これとほぼ同様の祭りは下益城郡小川町にみられる。しかし、亀蛇と笠鉾を除く、獅子・奴・毛槍・神馬・武者行列・飾馬といった出し物は県下の祭りによく登場している。祭りのありかたは県下各地の秋の大祭とほぼ同じ構成になっている。

この祭りには星祭りとしての要素が無く、多くの人達は稲の収穫儀礼であると意識している。妙見宮境内に祀られている祠に“作神さん”と呼ばれるものがあり、農民の信仰を集めている。

妙見信仰は中国において成立した星の信仰の1つであり、八代においても天台・真言宗がこの信仰を広めるのに大きく関係したと思われる。神剣の存在することなどから、その時代には星の信仰体系を保持していたものと考えられる。

しかし、近世、特に三斎公がこの祭りに関与してから、細川藩の直祭りとなり、後に松井家の請祭りとして執り行なわれてきた。いわば官製の祭りとしての性格を強めていったと思われる。藩による庇護が民衆の妙見信仰を広めることを妨げる結果につながったのではなからうか。八代妙見の信仰圏が成立し得なかったのにはかかる要因があったのと推測できる。

県下には八代妙見同様、本来細川藩の直祭りであったと伝承されている祭りが各地にある。これがどこまで事実であるか確認できないが、このことは、肥後藩においては神社祭祀に権力側がかなり深く関与したのではないかと推測させるものである。

ともあれ、妙見信仰が修験道や道教などと関係してその信仰を広めていったものであることは間違いない。直江廣治先生は中国や韓国の民俗学にも精通せられており、早くから日本と環シナ海地域の民俗の比較が盛んになられることを待望しておられた。この妙見の問題も筆者が直江先生から多くの御教示を仰ぐことのできるものの1つであった。それが永遠にかなわぬこととなってしまった。そのことを思うと痛恨に耐えない。

注

- 阿蘇品保夫 1991「中世八代の形成と海の志向」『『八代学』への招待』
金指正三 1973『星占い星祭り』
蓑田田鶴男 1970『八代市史』第2巻
森山恒雄 1991「近世初期の八代」『『八代学』への招待』
安田宗生 1993「熊本の妙見信仰」『市史研究 くまもと』第2号